

# 興味深人

## インタビュー

NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク理事長 田中 敦さん

新型コロナウイルスの感染拡大が、ひきこもりの当事者や家族に影響を及ぼしている。不登校やひきこもりを経験した人による支援（ピアサポート）を20年以上にわたり続けている、札幌のNPO法人「レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」理事長の田中敦さん（55）に、コロナ下での支援の現状と課題について聞いた。（文・鈴木雄二、写真・中村祐子）

—なぜ、経験者が支援にあたるのですか。  
「私は中学生の時に不登校になりました。中学卒業後に通つた予備校で不登校、ひきこもり経験者と出会い『自分はここにいていいんだ』と存在を認められました。気持ちになり、自分を取戻すことができました。ピアサポートによってつらい経験をアラスに転換していくことの大切さを伝えています」

—NPOでは、どのような支援に取り組んでいますか。  
「私が言め理事会はみんなかつて不登校やひきこもりの当事者でした。その経験を基に、不登校やひきこもりに悩む当事者へ、その親の相談に応じています。メールが多いですが、設立時から手紙でも受け付けています。返信には絵がぎを使い、言葉でうまく伝えるのが苦手な方へは『非言語コミュニケーション』を大切にしています。このばかり定期的に当事者や親が集う場を開いています」

## コロナ下 電話やはがきで接点づくり

—支援活動にも影響は出ていますか。  
「感染拡大で当事者会や親の会は対面のほかオンラインで開き、道東や道北など遠方の在住者は対面していません。それでも当事者会の2020年度の参加者は19年度の3割減、親の会は5割減でした。支援が必要な親に目が行き届かない懸念もあります。札幌市内のひきこもりの人々割合が岱多く、外出控えで足腰も筋力を衰えが進んでいる可能性があります」



### ■ひきこもりの人たち支援

1965年札幌市生まれ。北星学園大大学院修士課程修了。札幌学院大非常勤講師として社会福祉学を教える。1999年、不登校の経験を基に、経験者がひきこもり当事者の支援にあたる「レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」を設立。2010年にNPO法人化し、理事長を務めている。

力の衰えが進んでいる可能性があります」「親が要介護になるとひきこもりの子供は外部との接触を避け、ケアマネジャーが介入する介護保険を使わずに解決しようとするとする傾向があります。その結果、親の介護で熱力の機会が遠のいてしまうのは危惧します。このような人は電話や絵はがきを送り、できるだけ接点が途切れないとよいと思います」

—今後はどのような取り組みを考えていますか。  
「感染拡大に連なる解

は、ひきこもりの人は影響を及ぼしていますか。  
「感染拡大で外出を控えるようになり、社会奉仕がひきこもりと同じ状態になりました。家の外に出ることへのプレッシャーを感じた当事者からは『みんな外出しないな、気持ちは楽になつた』との声を聞くことがあります。一方で、同居する親が外出しなくなつて窮屈な思いをしたり、親子関係がぎくしゃくしたりする当事者や、感染が不安で体調を崩した当事者もあり、悪影響も見過ごせません」

### 子どものインフルエンザ予防接種 2、3割で発症抑える

インフルエンザワクチンを子どもに接種すると、発症を2、3割予防でき、既にインフルエンザにかかったことがある3歳児でも発症リスクが下がるとする研究結果を、山梨大エコチル調査甲信ユニットセンター長の山縣然太朗社会医学講座教授、横道洋司准教授らの研究チームがワクチンの国際科学誌に発表した。

約10万人の子どもを対象とし

た環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」のデータを利用。ワクチン接種の有無については6ヶ月、1歳、2歳の調査票を参照。発症の有無については1歳、1歳半、2歳、3歳の調査票を基にした。ワクチンを接種した子どもと接種していない子どもとの発症率を比較し、接種によって発症が何%抑えられたかを測定した。

その結果、ワクチンの発症予防効果は1歳半で21%、2歳で27%、3歳で31%だった。発症リスクが高い「年上のきょうだいがいる子ども」では1歳半で25%、2歳で25%、3歳で30%の予防効果が認められ、同じくリスクが高い「保育園に通う子ども」も、2歳で31%、3歳で30%の予防効果があった。

さらに、1歳半までにインフルエンザにかかったことのある子どもでも、ワクチンを接種することにより3歳時までの発症が21%抑えられる効果があることが確かめられたという。

力の衰えが進んでいる可能性があります」「親が要介護になるとひきこもりの子供は外部との接触を避け、ケアマネジャーが介入する介護保険を使わずに解決しようとするとする傾向があります。その結果、親の介護で熱力の機会が遠のいてしまうのは危惧します。このような人は電話や絵はがきを送り、できるだけ接点が途切れないとよいと思います」

—今後はどのような取り組みを考えていますか。  
「感染拡大に連なる解

は、ひきこもりの人は影響を及ぼしていますか。  
「感染拡大で外出を控えるようになり、社会奉仕がひきこもりと同じ状態になりました。家の外に出ることへのプレッシャーを感じた当事者からは『みんな外出しないな、気持ちは楽になつた』との声を聞くことがあります。一方で、同居する親が外出しなくなつて窮屈な思いをしたり、親子関係がぎくしゃくしたりする当事者や、感染が不安で体調を崩した当事者もあり、悪影響も見過ごせません」

©北海道新聞社